

「堅田＊はまさんぽ」の取り組みについての報告
地域と大学が協働で取り組むソーシャリーエンゲージドアートの可能性

Report on the “Katata＊HamaSanpo” project
The Potential of Socially Engaged Art as a Collaborative Effort
between the Community and the University

馬場 晋作
Shinsaku BABA

「堅田＊はまさんぽ」の取り組みについての報告

地域と大学が協働で取り組むソーシャリーエンゲージドアートの可能性

Report on the "Katata＊HamaSanpo" project

The Potential of Socially Engaged Art as a Collaborative Effort between the Community and the University

馬場 晋作
Shinsaku BABA

准教授（絵画・現代美術・社会的芸術実践）

The purpose of this report is to document the activities of the art project "Katata＊HamaSanpo". "Katata＊HamaSanpo" is a community-based art project that has been held since 2018 in the Hamadori shopping street located in the Honkatata area of Otsu City, Shiga Pref. The organizers of this project are students from Seian University of Art and Design, but they need the cooperation of local residents. It can be said that the project has been created through collaboration between the local community and the university. In this project, the keyword "Socially Engaged Art" is important. In this report, I will document the efforts of "Katata＊HamaSanpo" and discuss the possibilities of socially engaged art in which the community and university work together.

1. はじめに 社会的芸術実践の動向

この報告は、2018年から開催されている滋賀県大津市本堅田地域に位置する浜通り商店街周辺を活用したアート・プロジェクト「堅田＊はまさんぽ」の開催にいたる経緯を記録し、今後の検証の一助となることを目的としている。このプロジェクトは地域と大学とが協働して作り、2021年現在も進行中の活動である。ここではソーシャリー・エンゲージド・アート（Socially Engaged Art = 以下SEA）という近年のアートシーンを賑わせるキーワードが、重要な要素の一つとなっている。近年SEAに関わる多くの芸術実践が行われ、批評の現場においても同様の盛り上がりを見せている〔註1〕。SEAの簡単な定義として、文字どおり「社会に関与するアート」、「参加型アート」とも言われ、モダニズムアート以後のコンセプチュアルな芸術動向からニコラ・ブリオー／クレア・ビショップ論争を経た「リレーショナル・アート」の文脈を引き継ぐかたちで、世界各地同時多発的に実践されてきた潮流である。それはものを介することを前提とした旧来のアートから、人と人とのコミュニケーションを通じて生まれる社会との関係性を支持体とする新たなアートの形式と言える。またこのような振る舞いは、アートの文脈を超えて様々な社会実践に応用され、地域振興や観光PRのための「地域アート」といった文脈にも接続・応用されている〔註2〕。成安造形大学の学生

有志が企画・運営する「堅田＊はまさんぽ」と称するアート・プロジェクトが開催されたのは、そのような芸術実践の議論が広がる2018年であった。さらに2019年、2020年と形式を変えながら開催されることとなるが、2021年1月現在、人と人とのやり取りや、つながり自体をメディアとするこの実践が、2020年から猛威を振るう新型コロナウイルス感染症の大きな影響を受けたことは想像に難くないだろう。だがひとまず今回の報告ではこのアート・プロジェクトの開催の経緯や前提を記録し、2019年までの取り組みを整理することに務める。2020年に起こった未曾有の状況は、地域アートやSEAといった人々の「対面によるコミュニケーション」を前提とした芸術実践において、否応なく再考を迫る事態であった。この新たな状況に関連する2020年以降の取り組みと意義については、紙面の関係上、次号以降に論考をまとめることでお許し願いたい。

2. 堅田地域でのアートプロジェクトの経緯

2.1 堅田地域と堅田浜通り商店街

まず「堅田＊はまさんぽ」の舞台となった堅田地域や堅田浜通り商店街の歴史や地勢的特徴について、簡単に描写をしておく。滋賀県大津市堅田地区は、琵琶湖西岸、琵琶湖大橋西側に位置し、そこから南へと広がる地域の呼称である。かつて本堅田、今堅田、衣川の3つの町を合わせて「堅田浦」と称され、県内でも早く、中世の頃より地域社会が拓けた場所であった。ここは琵琶湖の内湖があることから、漁業、農業で栄えた町である。さらには陸路水路の交通の要衝であることから、流通、商業も栄え、「関務権」「漁業権」「上乘権」を独占支配し、その権力や資金力を基盤に早くから自治権を獲得し独自の文化や地域性、信仰が持続されてきた特異な地域とも言える。琵琶湖全域での漁業権、航行する船を取り締まる関務権、船を安全に運行させる上乘権、これら三つの権利は、1090年に賀茂御祖神社（通称：下鴨神社）への供物を調進する御厨が置かれたことに由来し獲得した権利で、朝廷との結びつきによって独自の権力地盤を築きあげたことも興味深い。ここに住まう人々は「堅田衆」や「堅田湖族」と呼ばれ、今も町の歴史や文化を保存・展示する「湖族の郷資料館」にはその「湖族」という名称が使われている。

その町の中心にあったのは言うまでもなく、琵琶湖へとつながる港であった。堅田港を中心とした琵琶湖に面した地域に商店街や住宅が並び、1927年には東洋紡績堅田人綿工場が操業を開始するなど、近代以降も町が栄えてきたことがうかがえる。しかし現在では、JR湖西線や琵琶湖大橋開通による生活様式の変化から、堅田地域の中心は琵琶湖内陸側に移っており、堅田港周辺の地域にはかつてほどの賑わいは感じられない。

「堅田＊はまさんぽ」の舞台となった堅田浜通り商店街は、その

ようにかつて賑わいを見せていた堅田地域の商店街の一つである。堅田商業連合協同組合によると、堅田の町を南北に走る西近江路(旧国道161号・現県道558号、高島大津線)と呼ばれた街道より琵琶湖側の地域には出町商店街、堅田中央商店街、堅田本通り商店街そして堅田浜通り商店街の4つの商店街が隣接している。浜通り商店街は本堅田地域に位置し、南は浮見堂、北は堅田漁港周辺までを結ぶ、琵琶湖湖岸に並走した細長い商店街である。かつて水運の要であった堅田港が町の中心にあり、浜通りはもっとも港に近く様々な物資や人々の往来により栄えた通りであった。隣接する南西地域に位置する東洋紡績の堅田人綿工場ではレーヨンが生産され、この新しい産業の従事者、特に寮住まいの女性工員らによって賑わったという。現在は1805年創業の造り酒屋「波乃音酒造」や地域特有の食文化である湖魚佃煮を専門とする「魚富商店」をはじめ、鮎ずしや和菓子、呉服、表具などを生業に商売を続ける商店がいくつか点在するが、多くの商店が店をたたみ、住宅地化が進んでいる。



図1：堅田浜通り商店街（撮影者：筆者
2019年）

2.2 湖族の郷アートプロジェクト

この堅田地域では、かつて「湖族の郷アートプロジェクト」と称されたアート・プロジェクトが開催されていた。「堅田*はまさんぼ」の取り組みは、この先行したアート・プロジェクトによる地域交流によってかなりの範囲で準備されていたと言っても差し支えはないだろう。そこでこの「湖族の郷アートプロジェクト」についても記述しておく。

「湖族の郷アートプロジェクト」は「湖族の郷アートプロジェクト実行委員会」が主催し、成安造形大学の学生が中心となって取り組み、そして堅田地域の人々が様々な形で協力して行われ〔註3〕たアート・プロジェクトである。2005年の初開催以降2011年まで、町中を使った展覧会型アート・プロジェクトとして計6回開催された（2008年は開催情報なし）。これらのプロジェクトの開催には、成安造形大学の卒業制作展が園城寺（通称：三井寺）や大津パルコ、びわ湖大津館などの美術館やギャラリーといった本来作品を展示する施設ではない場所で展示・開催されていたことも影響している。「湖族の郷アートプロジェクト」初開催となる2005年度の「成安造形大学卒業制作展」（2006年2月開催）は、園城寺を中心とした大津市各所から京都市美術館へと会場を移し開催されており、美術施設外での展示を構想していた学生有志による大学側への反発であった側面も無視できない。もともと美術施設外で作品が展示されることの意義は、啓蒙的で閉鎖的な美術制度の批判といった側面がある。「インスティテュート・クリティーク＝制度批判」の名のもと、パブリック・アートのように公共空間へ美術作品が飛び出していく潮流が生み出された歴史的背景を考えると、これらプロジェクトの発生は自然な流れであったのだろう。「湖族の郷アートプロジェクト」の開

催にあたり、大きな役割を担っていたのが当時学生であった南條智彦氏である。(彼は後に特別講師として成安造形大学プロジェクト授業を担当し企画・運営に関わる。)南條氏は企画団体「U-si」(ユージ)を立ち上げ、空き家、商店、神社、お寺、教会、琵琶湖の浜辺などを活用し地域に開かれた展覧会を目指した。そこで中世から湖族の郷として栄えた面影の残る本堅田のあらゆる場所が作品の展示場となった、「湖族の郷アートプロジェクト」が開催されることとなる。2014年に評論家、藤田直哉氏が文芸誌『すばる』誌上で「前衛のゾンビたち―地域アートの諸問題」を発表し、「地域アート」と呼ばれる事象に(批判的にしろ)注目が集まったが、全国的に見ても早い時期に開催された地域アートの事例と言える〔註4〕。展覧会規模は現在開催されている「堅田*はまさんぽ」より大きく、地域企業から協賛金を集め、多数のアーティストによる作品展示の他、ファッション・ショーやワークショップ、カフェの運営など、様々なイベントが開催された。今でも当時のにぎやかなイベントの様子を語る住民に出会う機会も多く、地域交流、集客、地域住民のアートへの理解を促したという観点で、成功したと言えるのではないだろうか。しかし2012年以降、南條氏がプロジェクト運営から身を引くことで、運営主体が消滅し、このアート・プロジェクト自体が断ち切れとなった。それからしばらくの間、成安造形大学とびわこ成蹊スポーツ大学、大津北商工会が共同で取り組んだ『歩こう♪大津北 観光・健康マップ&ブック』制作とまち歩きイベントへの参加(2014年)などいくつかの企画が行われたが、堅田地域において目立ったアート・プロジェクトやイベントが開催されることはなかった。2012年から2015年の間、「湖族の郷アートプロジェクト」の開催によって構築された堅田地域と成安造形大学との人的交流も減少し、堅田琵琶湖側の地域は学生にとって馴染みのない場所になりつつあった。

2.3 リサーチから展覧会開催に向けて

成安造形大学が招聘した、山出淳也客員教授(NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事/アーティスト。2018年度まで成安造形大学客員教授。)主導のもと、プロジェクト授業参加学生による大学周辺地域のリサーチが開始されたのは2016年のことだった。「地域とアート」をテーマに地域社会の問題に対し、芸術大学の学生がどのように関われるか、という問いが設定された。地域が抱える様々な問題を調査するとともに、その町の魅力を再発見する取り組みである。2016年度は、地域を絞らず様々な場所で可能性を探ることとなったが、結果として地勢的特徴やアート・プロジェクトの開催経験などをふまえ、自ずと調査対象が堅田地域に絞られていくことになる。調査の優先順位は、主体者としての地域住民や商店街の当事者に対するニーズ調査であった。地域が抱えている問題やニーズを汲み取り、開催側の

独善に陥らないためにどのようにプロジェクトをかたちにしていくのか慎重に検討することが共有されていた。学生たちはその上で堅田地域のフィールド・リサーチをすすめる。特に浜通り商店街の関係者への聞き取り調査を行うことによって、当事者たちのニーズを抽出することとなる。

2016年度リサーチの結果、先述の「湖族の郷アートプロジェクト」をポジティブに捉えている人たちから、商店街を使った地域活性のイベントの開催、及び成安造形大学学生との交流を求める声が集まった。2017年はその状況を踏まえ、翌2018年度開催を目標として、学生たちによる浜通り商店街を活用した展覧会の企画立案を具体化していった。また企画具体化の流れにおいて大津市が公募する「平成30年度大津市パワーアップ・市民活動応援事業」への助成金申請を行い、2018年秋頃を開催予定とした展覧会が企画、運営、両面から整備されていく。さらに助成申請にあたり、任意団体「地域とアートプロジェクト実行委員会」として、大津市への団体登録を行い、プロジェクト授業でありながらも学生有志による実行委員会として独立性を持った団体として位置づけられた。2016年度、2017年度のプロジェクト授業担当教員は山出淳也、宇野君平、伊庭靖子であり、高田学、馬場晋作も任意団体への参加というかたちで企画運営をサポートしていた。



図2：学生たちによる堅田地域でのフィールドワークの様子（撮影者：筆者 2017年）

2.4 「堅田＊はまさんぽ～アートでまち歩き～」開催

事業運営の中心を担う地域とアートプロジェクト実行委員会は、プロジェクト授業の履修登録で運営人材を募る経緯から、毎年4月に実行委員会のメンバーが入れ替わるという特色をもつ。2018年4月には新年度プロジェクト授業履修者が集まった。さらに2016年度より関わってきた学生有志らも参加することによって、前年度までの流れを引き継いだ新たな実行委員会が組織された。また2018年度は伊庭靖子、高田学、馬場晋作の3名の共担となり、山出淳也はアドバイザーとして本プロジェクトを見守る体制へと変わる。プロジェクトは、展覧会要項の作成、企画詳細の決定、広報活動など、地域の自治会（特に浜通り商店街に隣接する永楽自治会）、大津北商工会と連携しながら準備をすすめることとなる。開催概要を検討する地域とアートプロジェクト実行委員会メンバーと浜通り商店街の関係者を交えた会合の中で、アート・プロジェクトの名称が「堅田＊はまさんぽ～アートでまち歩き～」に決定する。この名称は「湖族の郷アートプロジェクト」の流れを汲みながら、新たな企画として、さらに作品展示や鑑賞を主たる目的とせず、堅田の町の魅力を歩きながら発見するという開催趣旨が反映された結果であった。そこには大規模なアートプロジェクトという指向性ではなく、小さいながらも持続的に人と人との関わりを大切にしたいという学生や浜通り商店街当事者の思いが見いだせる。同年8月に学生に対して出品者公



図3：「堅田*はまさんぼ～アートでまち歩き～」白い家での展示風景（撮影：奥村元洋 2018年）



図4：「堅田*はまさんぼ～アートでまち歩き～」古手吉呉服店での展示風景（撮影：奥村元洋 2018年）



図5：「堅田*はまさんぼ～アートでまち歩き～」展示風景 (1)四間丁愛 (2)《真夏日II》 (3)キャンバス、アクリル絵 (4)91×91cm (5)2018年 (6)作家蔵（撮影：奥村元洋 2018年）

募を行い、教員、助手、アシスタントを中心とした大学関係者へ、招聘アーティストとして出品依頼を行う。結果として2箇所の屋内展示会場や6箇所のショーウィンドウ、民家の軒下、公園や寺院の境内など計13箇所で、招聘アーティスト7名、学生21名、特別参加として堅田学区自治連合会 堅田まちづくり連絡協議会「案山子アートチーム」、浜通り商店街菓子店「金時堂」の店主による工芸菓子など、総勢29名1団体が展示を行う展覧会となった。筆者も招聘作家として学生から依頼を受け、作品を出品したことも付け加えておく。また会期中には夜間に作品を鑑賞する「ナイトギャラリーツアー」や浜通り商店街の町歩きを目的とした「はまさんぼツアー」など、学生たちが企画したイベントが実施され、学生をはじめ多くの大学関係者が堅田浜通り商店街を訪れた。メイン会場に設置した芳名帳には264名の記入があったが、ショーウィンドウをはじめ屋外展示などは記名者数より多くの人々が鑑賞したと考えられる。

「堅田*はまさんぼ～アートでまち歩き～」

会期 | 2018年10月26日(金)～11月4日(日) ※会期中無休

開催時間 | 10:00～16:00

会場 | 堅田浜通り商店街およびその周辺(大津市本堅田1丁目、2丁目付近)

主催 | 地域とアート実行委員会・成安造形大学

協力 | 堅田商業連合協同組合・堅田学区自治連合会・大津北商工会

助成 | 平成30年度大津市パワーアップ・市民活動応援事業

【出展アーティスト】

○招聘アーティスト

石井誠・国谷隆志・四間丁愛・信ヶ原良和・馬場晋作・藤井俊治・福田真知

○学生アーティスト

青木海優・池澤虹歩・板原静夏・うえだあやみ・上田優喜美・上野モモ・岡田岳大・吉良加奈子・四宮弘賀・清水果穂・城ヶ崎をり・園部映莉香・千坂尚義・中筋みなみ・中村あかり・遼haruka・廣野鮎美・みなづきとうか・宮崎菖子・山口世楠・ゆりかき

○特別参加

山本信一(金時堂)・堅田学区自治連合会 堅田まちづくり連絡協議会「案山子アートチーム」

【関連イベント】

○ナイトギャラリーツアー | 10/30(火)、11/1(木) 20:00～

○はまさんぼツアー | 10/27(土)、11/4(日) 13:00～

2.5 2019年度「堅田*はまさんぼ～旅する浜の倒置法～」

2019年4月には新たなプロジェクト授業履修者が集まり、2018年度展に関わった学生有志らも参加し、新組織体制となった。また

2019年度のプロジェクト授業担当教員は、筆者のみとなる。2019年度の当初の授業計画として、アート・プロジェクト開催にかかる事業費獲得を主たる成果目標と設定した。2018年の開催にあたっては前年度に大津市の補助金が獲得でき、その予算を中心とすることで展覧会開催が可能となった。しかし2019年4月の段階で補助金獲得の予定はなく、その年での大規模な展覧会開催は見通せないことから、2020年に開催するための事業費獲得を目標とした経緯がある。しかし5月に入り急遽、成安造形大学【キャンパスが美術館】が企画する「2019 秋の芸術月間 セイアンアーツアテンション 12 Roots Routes Travelers」と「堅田*はまさんぽ」との連携開催の話が持ち上がる。成安造形大学【キャンパスが美術館】が「令和元年度 滋賀県『美の滋賀』プロジェクト推進事業」を採択し、その連携事業として「堅田*はまさんぽ」を位置づけることで、2019年度においても展覧会形式のアート・プロジェクト開催が可能となった。前年と同様、浜通り商店街関係者と実行委員会学生、教員とが協働し企画・運営を行うこととなる。しかし予算獲得時期が遅れたことと、前年度の企画内容の検証・反省をふまえ、複数のアーティストが参加するグループ展形式ではなく、1人もしくは1組の個展形式での開催とする方針となった。前者の理由として、複数の参加者との連携がスケジュール的に難しかったことがあげられる。後者の理由としては、地域住民が参加可能なワークショップをプロジェクトの重要な一部として取り入れ、より幅広い参加者を募ることで地域と交流を深めながら開催できる展覧会を目指したことがあげられる。このような観点から京都を拠点として活動する美術家、加納俊輔、迫鉄平、上田良によって2014年に結成されたアーティストユニット「THE COPY TRAVELERS」1組を招聘し、ワークショップから展覧会まで地域との関わりの中で作り上げることを目標に、取り組みが行われた。

展覧会開催に先立つ2019年9月29日、前年度も会場に使われた本堅田の空き家（通称：草の家）にて、THE COPY TRAVELERSを講師に招いたワークショップが開催された。成安造形大学学生を中心に、地域住民や県外からの参加者も含む35名がワークショップに参加した。このワークショップはTHE COPY TRAVELERSのアドバイスを受けながら、様々なものをコピー機で印刷してイメージを作る彼ら独自の制作方法「コピササイズ」を体験し、4名1組のグループワークで1冊のジンを制作するものである。コピーの素材には運営に関わる学生が、地域住民や商店から提供を受けた堅田ならではの素材も多く準備されており、完成した成果物は2019年10月25日からの展覧会にも展示されることとなった。展示会場は前年度に使用した6箇所のショーウィンドウとワークショップにも使用した空き家「草の家」合わせた計7箇所を使用し、草の家は週末の金、土、日のみ開廊するかたちでの開催となった。ワークショップ



図6：THE COPY TRAVELERS によるワークショップ風景（撮影：筆者 2019年9月29日）



図7：THE COPY TRAVELERS による「堅田*はまさんぼ～旅する浜の倒置法～」展示風景 ワークショップ参加者が制作したジグが並ぶ（撮影：堺俊輔 2019年）



図8：THE COPY TRAVELERS による「堅田*はまさんぼ～旅する浜の倒置法～」比良薬局での展示風景（撮影：堺俊輔 2019年）

プの開催など新たな試みによって可能性を感じた反面、週末開催としたこと、学生の出品公募を行わなかったことによる学内広報や学生の当事者性の減退からか、芳名帳への記名者は163名と前年度に満たない結果となった。しかし、THE COPY TRAVELERSがショーウィンドウに展示した作品の数々は、町の人々に深い印象を残し、「堅田*はまさんぽ」というアート・プロジェクト自体の周知につながったのではないかと思われる。

「堅田*はまさんぽ～旅する浜の倒置法～」

会期 | 2019年10月25日(金)～11月10日(日) ※金、土、日曜日のみオープン

開催時間 | 10:00～16:00

会場 | 堅田浜通り商店街内 通称「草の家」

主催 | 地域とアート実行委員会・成安造形大学

協力 | 堅田商業連合協同組合・堅田学区自治連合会・大津北商工会

助成 | 令和元年度 滋賀県「美の滋賀」プロジェクト推進事業

【関連イベント】

○ワークショップ!

開催日時 | 2019年9月29日(日)

3. 現状把握と議論の整理

地域格差、高齢社会、多様性のある社会環境の整備など、今日さまざまな諸問題が声高に叫ばれている。堅田浜通り商店街も例外ではなく、以前のアート・プロジェクトが開催されていた7年前より確実に高齢化が進み、商店街としての活力は明らかに低下している。「湖族の郷アートプロジェクト」では会場として使われていた銭湯は廃業し、空き家は整地され真新しい宅地として生まれ変わるなど、緩やかであるが確実な変化が見て取れる。筆者は2016年より成安造形大学プロジェクト授業の開講を機に、この地域を学生とともにリサーチすることとなった。学生たちは文化的なポテンシャルや琵琶湖岸に位置する特徴的な町並みの魅力を再確認するとともに、この変化にも目が奪われたようである。学生、教員、地域住民とが共に考え、地域の文化やつながり、そしてこのような変化を活用し、アートを通してその場所と関わりを持つような企画が検討され、結果として2018年に「堅田*はまさんぽ～アートでまち歩き～」を開催するに至る。本展では地域の人々と関わりながら行う、企画、運営、広報活動を通して、あるいは学生自ら作品を制作することを通して、地域の現状を知り、そして考える絶好の機会となった。地域社会との関係から作品制作をとらえる、またそのような作品を鑑賞する、何より今まで近いようで足を運ばなかったこの地域に赴く、といった様々な状況を生み出すきっかけとなった。また2019年は

学外からアーティストを招聘し、町中で学生や地域住民とともにワークショップを開催し、成果物を展示することで、共に展覧会を作り上げる企画が提案された。必ずしも常に企画の狙いが成功したわけではないが、ここでの教員はキュレーターではなく、企画主体である学生や地域住民の経験不足を補うためのアドバイスや調整など、あくまでもアドバイザー的な役割を担うこととなる。できるかぎり学生団体と地域住民との合議によって、企画を進めるという側面を重視した運営方針であることが特徴であり、それら課題も含め関係性を考察する良質な素材と言える。

学生やアーティストは部外者のようでもありながら、この地域社会に新たに関係性を結ぶ参加者でもある。我々は、今後も当事者である地域住民のそばで並走する中間の存在でしかないのかもしれない。地域における学生という存在にこんなアウトラインは引けないだろうか。学生という立場は地域社会において特殊な構成員である。「学生」は永続的に定住する存在ではなく流動的で、しかし数年間限定の当事者として社会に参加する意味で特殊な存在だと言える。このプロジェクトの実行委員である履修者は毎年入れ替わり、4年間でほぼ担い手が入れ替わる。この点においてかつて同じ場所で開催された「湖族の郷アートプロジェクト」とは、組織のあり方が大きく異なっている。ここに地域と大学が協働で取り組む、「持続的で新しい仕組み」が広がっているように感じる。地域住民（当事者）と鑑賞者（観光客）以外の要素として、どちらにもつかないような存在の「学生」や「大学」という存在のあり方を位置づけていくと、組織の中における持続性、流動性、そして新規性という観点がポジティブに浮かび上がってくる。それは社会に関与するアート「ソーシャリー・エンゲージド・アート」の議論において、少し違った視座を与えることができるのではないだろうか。現在「堅田*はまさんぽ」の枠組みは、表現活動に活かす学びの場として、にぎわいを創出する発想の場として、新たなコミュニティに接続する関係の場として様々な方向へと可能性をひろげつつある。地域と大学が協働で取り組むソーシャリー・エンゲージド・アートの可能性について、この「弱い」当事者である学生と、その特徴である流動性が具体的にどのような効果をもたらすのか、今後もこの活動を見守り考察を継続したいと考える。

[註1] ソーシャリーエンゲージドアートの国際的議論の事例については、パブロ・エルゲラ著、アート&ソサイエティ研究センターSEA研究会訳、ソーシャリー・エンゲージド・アート入門 アートが社会と深く関わるための10のポイント、フィルムアート社、2015。などがあげられる。

[註2] このような「地域アート」の問題設定に関しては、藤田直哉、「前衛のゾンビたち—地域アートの諸問題」、地域アート—美学／制度／日本、藤田直哉編、堀之内出版、2016、p.11-43。による。

[註3] 美の滋賀くらぶ、「湖族の郷アートプロジェクト・天津市堅田」、滋賀文化のススメ、<https://www.shigabunka.net/archives/2644>、(参照 2021-2-23)。

[註 4] 「地域アート」の呼称の出自については、藤田. 2016. 及び、中島水緒. “地域アート”. 美術手帖. <https://bijutsutecho.com/artwiki/18>, (参照 2021-1-11). を参考にした。また、日本における地域アートプロジェクトの源流は 1991 年及び 1994 年に石川県鶴来町（現白山市）で行われた「ヤン・フォート IN 鶴来」があげられるだろう。

参考文献

ソーシャリーエンゲージドアートの国際的議論の事例については、パブロ・エルゲラ著. アート & ソサイエティ研究センター SEA 研究会訳. ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深く関わるための 10 のポイント. フィルムアート社, 2015.

藤田直哉著編, 会田誠, 遠藤水城, 加治屋健司, 北田暁大, 佐塚真啓, 清水知子, じゃぼにか (有賀慎吾, 村山悟郎), 田中功起, 藤井光, 星野太著. 地域アート—美学／制度／日本. 堀之内出版, 2016.

山本浩貴. 現代美術史—欧米、日本、トランスナショナル. 中公新書, 2019.

堅田観光協会. “堅田の見所”. 堅田観光協会. <http://katatakankokyokai.com/katata.php>, (参照 2021-1-11).

大津市歴史博物館. “堅田と比良山麓の村々”. 大津市歴史博物館. http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/event/jyousetsu/theme_1.html, (参照 2021-1-11)

株式会社ストレイナー. “東洋紡の歴史・創業ストーリー”. 経済メディア「Strainer」. <https://strainer.jp/companies/613/history>, (参照 2021-1-11).